確認されている定説についての説明が教育の中心であり，自分だけの考え方や新しい学説の紹介などは原則的には禁ぜらるべき性質のものと考えられ，その教科書についても同じことが言えると思う。

たとえば高校の地理の教科書にはその人だけの考え方による世界の気候区分などが見られるが，これは少なくとも今述べたような私の意見には相反するもので，この種のことは大学で学ぶべきものではなかろうか。しかしこれとてもあくまで私一箇の考え方であり，これと対立的の意見があっても一向にさしつかえなく，いろいろちがった考えが併存するところに大学の自由と学問の発達が見出されるのであろう。

地　図　開　眼

幸　田　清　喜

ずっと以前のことで，しかもつい昨日のできごとのように新らしい幾つかの思い出の中から一つ — 白山の出作小屋での一夕，赤々と燃える囲炉裏の火を囲んで主人と私の対話 — 麦もソバのあとでは余り収量は出ないでしょう。小豆は？大豆は？といった私の質問に主人は素直に答えていた。一通り聞きたいことを聞いたので，明日の予定は，ここから坂道を下り小川を渡り，かや原を分け薙畑を右に見て…といったようなことを言うと，突然主人は「しまった」とどなった。そして「税務署だ。正直に言って手帳に書かれてしまった。明日起きがけに出作の途中にふれまわらなくては……」（数十年前すでに税務攻勢はこのような奥山までも見逃がすものでなかったらしい。）

私はふれまわられてはかなわないと思った。身分証明書なども見せて陳弁これつとめたが一向に埒があかない。「どうして私が税務署なのか」と聞くと，「あんたここへは初めてだと言いながら，土地の様子を何もかも知っているではないか。税務署に違いない。」と言う。そこで私は種を明かし，「この五万分の一の地図にみな書いてある。」と言って地図を見せた。「曲がりくねった線ばかりではないか。ごまかされないぞ。」と言いながら一体この線は何だろうといぶかる主人の好奇心に私は教育の可能性をみた。それから学習段階にはいる — 等高線だ，崖だ，広葉樹林だ，桑畑だと学習が進むにつれ主人の目がだんだん輝き出してきた。ここまでくれば，もう占めたもの，主人の目が輝きを増すに応じて私の態度が次第に横柄になってきたようである。小一時間ばかり講義して，さて最後にとどめをさす思いで「これがあなたのこの家だ。」と教えた。こんな小屋まで出ているとは…勿体ないと主人絶句。やがて「この地図を譲ってほしい。」ときた。「これは中々手に入らない。入ってもひどく値が高い。」と私，「いくら高くても是非とも」と主人，私は頃合良しと見て白状した。 — 「一枚１３銭，金沢でも小松でも売っている。」 — 私は山から下りてすぐ白

峯図幅を送り届けた。主人の喜びが手にとるように私の心の中にひろがっていた。

私は地理の教師として長年地図を相手にしてきたが，教壇でこれほど心のあたたまったことも無いし，教わる方もこれほど意欲的になったことが無いようである。教壇では何かが欠けている。何かに甘えているのか。私は肉迫するものを求めて得られぬ４０年の不毛を恥しく思っている。

私の始めての女子学生たち

別　技　篤　彦

今ならどの大学でも女子学生の姿はめずらしいものではないが戦前ではそうではなく，教えるほうでも女子学生を受持った経験のある先生はめったになかったろう。戦時中私は地理調査のためジャワに派遣されていたが，戦争の末期，それまで戦争によって閉鎖されていたジャワの高等教育機関を再開されるに当り，日本人の先生を何人か加える計画がなされ，私も本職の外にジャカルタ女高師の教授を兼任して学生を教える命令を受けた。私にとって女性を教えるのは始めてのことであり，しかも異民族のそれなので，最初の時間はひどく緊張して教壇に立ったものである。私の担当したのは専攻科の学生１０名であった。講義はインドネシア語でやったが英語やドイツ語の単語もちゃんぽんにまぜて，われながら心臓だったと思うが，それでもみな熱心にノートをとっていたところをみると，どうにか判ってくれたらしい。ところが最初の時間からノートもとらず，机に頬づえをついて私をじっと観察している娘があった。１０人の中では最もしっかりした娘だという印象をうけた。彼女は私の講義が終ると立ち上り，日本のジャワ占領の目的，戦時中における日本の女子労働の実態，その他およそ地理に関係のない質問をあびせて私をだいぶあわてさせたものである。

その後も私がインドネシアの国土の美しさやその魅力などについて話していると，いきなり，"先生！　だから私たちは困るのです。そうしたことで外国人が次々に私たちの国にやってきた歴史を考えると，何か我慢できない感じがあるのです。この気持お判りでしようか" とあびせてきたものだ。私ははっとした。豊かな自然，無限の資源の可能性などをもつゆえに絶えず外国に植民地化され，今も他人の戦争の中にまきこまれてしまっているインドネシア民族の悩みがはっきり理解できたからである。私は彼女たちがかわいそうでならなかった。ほんとうにインドネシア人の身になってその心持を理解しなければならぬことを今さらのように思い知らされたのだった。

私はそれから彼女たちと胸襟を開いていろんなことを語りあうようになった。授業は講義よりゼミ的なもの，互の考えの交換の場のようになり，私はそれを通してインドネシア人の考え方について実にいろいろの事を教えられたのである。何より若い学生たちの反植民地主義の強い感情には目を見張らされるばかりであった。私と彼女たちとのつきあいは１年足らずで終った。それは１９４５